

2年間のデイケア通所を経て一般就労が可能となった アルコール依存症患者の事例

○篠田真弓(心理士)¹⁾ 尾崎君子(看護師)¹⁾ 山口智也(医師)²⁾

1) 医療法人耕仁会札幌太田病院 1階デイトケア 2) 医療法人耕仁会札幌太田病院 精神科

1. はじめに

アルコール依存症は飲酒のコントロール障害を中核とする疾患で、随伴する症状を主訴に受診する人が多い。当院は古くからアルコール依存症に対する治療と社会復帰に取り組んできた。今回入院治療からデイケア、社会復帰に至る症例を紹介し、有効性と今後の課題を検討したい。

2. 症例

50代女性。入院時診断：ビタミン(ニコチン酸)欠乏性脳症、アルコール依存症。
10代より飲酒。高卒後就職し結婚を機に退職するが産後間もなく離婚し、以後母子家庭で介護士として稼働。20代より習慣飲酒となり、30代では毎晩焼酎を4合飲んでた。X-3年、職場での対人トラブルにより抑うつ症状が出現。精神科クリニックにて薬物療法を受けるも自己中断。同時期に父が他界し、飲酒量はさらに増加した。X年5月、腰椎ヘルニアの悪化に伴い退職したことを契機に抑うつや意欲低下が再燃し、自宅に引きこもって連続飲酒が始まった。X年7月衰弱のため救急搬送され内科へ入院した。精神状態不安定で、意識障害が持続し、同院での対応困難となり、家族が行政に相談し当院を受診。同意能力を欠くため医療保護入院となった。

3. 治療経過

①入院経過

入院当初は低栄養、褥瘡、筋力低下、不穏多動がみられ、身体的拘束および末梢補液にてビタミンの大量投与、経管栄養、身体リハビリを集中的に行い、徐々に回復が見られた。アルコール依存症の治療には、認知行動療法や集中内観を通じて入院理由や酒害を自覚するようになり、デイトケア試験通所、院外断酒会参加、外泊訓練を行なった。入院約7ヵ月で母宅へ退院したが、母からは再飲酒を疑われたり、入院前の行動を責められるなど、関係性に課題があった。

②退院/デイケア通所～復職

デイケアは週5日で開始し、断酒会は毎日参加していた。衝突の多い母との同居を解消し退院後約1ヵ月で単身生活となった。断酒の決意は強かったが、行動計画を立てる難しさや、リハビリ期間についてスタッフ、本人との間に相違があった。通所当初、心理教育に参加されていたが、集中力に欠ける様子あり、指導が必要であった。また、主治医が半年間は車を運転しないように指導しても、退院後2ヵ月で車の運転を再開し就職の面接も受けていた。本人は職員に対して「もうデイケアをやめる！ここにも何にもならない。自宅で過ごした方がよっぽど良い」と主張した際には、職員は傾聴した上でデイケアを続ける必要性について本人と確認しあった。その後も一般就労を希望していたが、否定せずそのための課題を解決志向で向き合えるよう指導した。求職活動が難航したこともあり「自分はまだ駄目なんだ。働く時期じゃない」と方向転換し、退院7ヵ月後(X+1年10月)にB型就労支援事業所への通所を併用した。デイケアでは心理教育、自助グループに継続参加し、他者の意見を取り入れ発言したり、称賛するなど参加態度が以前と変化した。X+3年2月希望していた介護職として復職することが出来た。現在はデイケアと介護職を継続しており、フルタイムでの就労に向け努力している。デイケアに対しては「担当スタッフが褒める部分と悪い部分を明確に伝えてくれたことが信頼関係、デイケアを続けることに繋がっていると思う」と振り返られている。また、母との関係は徐々に修復しており「笑って会話が出来るようになった」と話している。

4. 考察

デイケアでは、心理教育を通し疾患理解を深めたこと、スタッフとの衝突、和解を通し、思い通りにいかないことへの耐性が治療中断のリスクを回避できたと考える。本人の行動特性に合わせ支持的に関わることが奏功したと言える。また、本人元来の人との関わり合いを大切にす傾向が、デイケア、断酒会の継続、仲間作りにも繋がったと考え、本人自身の仲間作りへの努力や粘り強く行動する資質も回復の大きな要素である。今後は、復職後のストレスに注意を払い対処スキルを身につけるよう支援の継続が必要である。